
零崎棟識《ゼロざきむなしき》の人間設計

夢路 遥彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぜろさき とうしき
零崎棟識の人間設計

【Nコード】

N3159P

【作者名】

夢路 遥彦

【あらすじ】

『零崎一族』 - それは“殺し名”の第三位に列せられる殺人鬼の一族。

一族の中の異端者『零崎曲識』に匹敵する異常者『零崎棟識』
禍禍しいフォルムの金鎧“乾坤一擲”『ホールインワン』を操り一族の中で唯一『無機物』の殺戮を得意とする彼はそのポリシーから人類最強との戦いに明け暮れる！

家族の為に彼女に殺される訳にはいかない彼はどのように人類最強と争うのか……！

そしてその死闘の果てにあるものとは一体？

鉄壁崩壊（前書き）

初投稿です至らない部分が盛り沢山ですが、見逃してやってください。
それではどうぞ。

鉄壁崩壊

そこはとある政令指定都市のど真ん中……からやや外れたところにある見る者に無駄な威圧感を与えるビルだった。

その中では二人の男女が永遠の愛を現在進行形で誓い合っているところである。

端的に言ってしまうえば結婚式の最中であり、この甘い時間を邪魔する者が居たならば、すぐさまサラブレッド級の名馬に蹴られて即この世からおさらばすることであろう。

いや、どうやら本当におさらばすることになりそうだ。

目立たぬようひっそりと、されどその『世界』特有の拭い去る事の出来ない殺気を身に纏った黒いスーツの男たちが、会場のあちこちに潜んでいる。

まさに鉄壁の防御！完璧な警備！この警備体制を『一人』で作り上げた、縦無巻鉄たてなしかんてつは広い会場の隅で一人悦に入っていた。

「フツ、さすがにこれほどの『空間』を『固定』するには骨が折れたが……まあそれだけの苦勞に見合うだけの報酬はもらえそうだな。ククツクハハ。」

なんとも悪人風の笑い方をする怪しいオッサンから品の良さそうな招待客達は、まるで潮の引くように離れていくが、怪しいオッサンは自分の考えに夢中なために気づかない。

だが、急にオッサンはご満悦な雰囲気から懔然とした表情になると、こう呟いた。

「しかし依頼主にも困ったものだ。どこの組織に狙われているか知らんがあそこまでおびえなくとも良いものだ。この『極炎鉄壁』《ファイヤーウォール》が警備するというのに。」

そう言つて、徹夜続きなのかくつきりとクマをつくつた気の弱そうな青年、もといこの結婚式の新郎の顔を思い出す。

チラリと彼の方に目をやると、隣の巨大な新婦と美女と野獣：いやもやしと野獣を現代に再現していた。

呆れたようにためいきをついてオッサンはぼやいた。

「あれでは尻に敷かれるのは決定だな。弱い人間というのはこれだから嫌になる。」

そして、思い出したように手にしたグラスを傾け、ちびりちびりやりながら続ける。

「そのくせして。警備するのはこのフロアだけでいいとかのたまいやがる。まあそれでも俺の警備体制は鉄壁だがな！」

力強い台詞と共にオッサンはグラスの中身を飲み干した。

と、同時に目の前が揺れる。

オッサンは「俺も歳だな」と苦笑いしながらテーブルの方へグラスを置きに行こうとした。

まさにその時！

床が、真っ二つになった。

そうして出来た穴の中に新婦が新郎が信頼する部下達がそしてオッサンが吸い込まれるように落ちて、堕ちていく。

落下するオッサンは混乱しながらも必死に考えていた。

「馬鹿な！馬鹿な！この俺の警備が破られるなどそんなことがあつてたまるか！

そもそも床が割れるなど有り得ない！人間に出来るはずが無い！有り得ない！有り得ない！なぜだあああああ！！」

そうして彼は死んだ。

そうして無駄な威圧感を放っていたこのビルは完全に、ある大泥棒に言わせれば十全に完膚なきまでに崩壊し崩落した。

鉄壁崩壊（後書き）

続きは多分すぐに出します。

乾坤一擲（前書き）

二話にして主人公登場です。
変な奴ですハイ。

乾坤一擲

周囲に無駄な威圧感を与えていたビルが倒壊したのにはもちろん訳がある。

それはちょうどオッサンが怪しい笑い方をしていたあたり、ビルの地下駐車場で二人の人影が歩いていたところから始まる。

「なあ棟識さん本当に大丈夫なんっちゃか？」

先に口を開いた片方の人影、麦藁帽子をかぶった線の細い華奢な青年だった。

この豪華なビルの中で着るには少々不釣り合いなのではないかと思われるスリーブレスの白いシャツに、よれよれでだぼだぼのズボン、両足にはボロボロのサンダル。首には白いタオルをかけていて、田舎に住んでいる牧歌的な青年、といったところだろうか。

ただし、右肩から下げている細長い黒い鞆がなにやら違和感を発している。

「嫌だねえ、軋識くん。」

僕はこれでも大規模殺戮には定評があるんだね。

それに僕等は我等が長兄零崎双識くん人呼んで『自殺志願』《マインドレンデル》からの指令を受けたんだから、一族にケンカ売っちゃったこの憐れなもやしくんをぐちゃぐちゃのごちゃごちゃにしにきたんじゃないか、もっと信頼して欲しいんだね。」

ターゲットの写真を見てクスクスと笑いながら、返事を返したのはもう片方の人影だった。

20代後半ぐらいに見える男で。シャム猫の様にひん曲がった目と口を直せば、モデルといっても通用するであろう男の容貌は残念な

がら奇抜過ぎるファッションによってだいなしであった。

まず紅白のマーブル模様によってやけにめでたい感じになっているマフラーが目につく、さらにやけに裾の長いタキシードに近い灰色の背広に金色が眩しい金鎧がやけに大量に描かれたネクタイ、そしてこれまでの正装風の法則を全く無視してアメリカ軍で採用されていたカーキ色のズボンを履き、最後にギリギリで保たれていた服達の調和を乱さんがごとくかの源義経が愛用したという一枚歯の銀色の下駄を履いていたなんというか全体的に余計な部分の多いファッションである。

そんな珍妙な格好をしながらも、どこからか氣品を漂わせる彼は下駄をランコロンと言わせながら歩きつつ続けた。

「そもそもだね、なぜ愛すべき家族諸君は僕と一緒に仕事をするのを嫌がるんだね？」

さすがに双識くんには負けるけどこれでも大きな愛を持って接しているつもりなんだね。」

よよよ、と背広のポケットから出した『哀愁』《あいしゅう》と書かれている黄色いハンカチを出すと涙を拭く振りをしつつチラリと軋識を見る。

見られた軋識はうんざりした顔をしながらこう答えた。

「仕方ないっちゃよ、聞いた話じゃあんたは『ペリルポイント』と一緒に戦闘のスタイルが派手すぎて周囲どころか半径一キロメートルの単位で辺りを破壊するそうだったちゃ。そんな危ない人間と……！おっと俺達は人じゃ無いんだったっちゃ。

そんな危ない殺人鬼と一緒に仕事するのは誰だって敬遠したくなるっちゃ。」

愛する家族に危ないと言われて少々落ち込んだ彼……もとい零崎棟識は気を取り直してもう一人の男……もとい零崎軋識に言った。

「でも、そんな僕の仕事に付き合ってくれる軋識くんはいいひとだね、嗚呼まったくもっていい人だね、是非とも次の仕事にも「遠慮するっちゃー！」

……まあいいんだね。

目的地に着いたんだね、さあ下がってほしいんだね此処からは『乾坤一擲』『ホールインワン』こと零崎棟識によるバイオレンスかつバイオレットな時間なんだね良い子はもう帰るべきなんだね！」

かなりテンションの上がってきた棟識だが残念ながらバイオレットに暴力的な意味はない。

そう言い終えるとやけに長い背広の裾に隠れていた腰に装着された金鎚を手にとった。

それはどう控えめに見ても大工道具では通らない禍禍しいフォルムをしている。

柄はエジプトで再生の象徴とされているアンク十字（某トレーディングカードゲームの死者○生のアレ）が、

細長く伸ばされた形をしていて先端にある輪の部分に棟識は指を引っ掛けてクルクルと回していた。

しかし、最も怪しかったのはやはり鎚の部分であらう。

拳大の大きさで後ろの通常の金鎚では釘抜きにあたるところが、救いを求めるかのように宙に手を伸ばしている人々が彫り上げられている。

これこそが、零崎棟識を『13番目の異作』そして『乾坤一擲』と呼びせしめた『ホールインワン』であった。

そのいわく有りげな金鎚、もとい『ホールインワン』を訝しげな様子で見っていた軋識が口を挟む。

「もしかして……それが例の？」
棟識が返事を返す

「ん？ああそうだよこれが僕の愛しい《ホールインワン》だね。」
その返事を聞いてさらに疑いを増したらしい軋識は続けた。

「俺がレンから聞いた話じゃどんな建造物でもそれが無機物である限り一撃で破壊するって聞いたんだが……。」

そう言われた棟識は慌てて答える。

「いやいや待つんだね、いくら僕と《ホールインワン》が凄くても一撃ではムリなんだね。

ちゃんと手順を踏まないといけないんだね。

とりあえず周りを見るんだね。」

そう言われて軋識が周りを見ると闇に慣れてきた目にあちこちの壁や柱に埋め込まれた妙なデザインの杭が大量に突き刺さっているのが確認できた。

「これが……手順っていうやつっちゃか？」

棟識は嬉しそうに答える。

「そうなんだねこれがターゲットの居る階ある以外の全ての柱や壁にさしてあるんだね。」

そんな棟識に対して怒ったように軋識が言う。

「おい！そんなことが出来るのなら中に入って蹴散らした方が「黙れ。」ぐっ……。」

これまでのおちゃらけた雰囲気が一変し突き刺す様な殺気を放ちはじめた棟識に百戦錬磨のはずの軋識が言葉に詰まる。
そんな軋識にまた調子が元に戻った棟識が言う。

「まあそんな訳だから後は一撃だけなのね。
ほら、早く僕のそばに来るんだね。」

そう言われてかなり警戒しながらも軋識が棟識の近くに来ると、非常に満足げな表情で目の前の柱に《ホールインワン》をたたき付けながら楽しそうに言った。

「さて、それでは。」

「今日も楽しく零崎を始めろんだね。」

その5分ご無駄な威圧感を放っていたそのビルは完膚無きまでに崩壊し無駄な威圧感を放つガレキの山と化した。

乾坤一擲（後書き）

果てしなく駄文ですが次回も是非……。

崩壊後話（前書き）

更新遅くなってすいません。

にしても自分には文才が無いなあ。
とシミジミと思ってしまいました。

崩壊後話

ここはとある政令指定都市のど真ん中……から少し外れたところにある、ガレキの山。

零崎棟識の《ホールインワン》によって破壊されたビルの成れの果てである。

通常では有り得ないほどに粉々になったビルは中に居た生命を一つ残らず消し去ったはずなのだが、どうやらまだ動くものが居たらしい。

「うーんこのガレキを壊せば外に出られそうなんだね。えいっ！」
“ドゴシヤア！”

という轟音と共に残された中でも比較的大きめのガレキが吹っ飛び、そこから二人の殺人鬼が出てきた。

「ようやく地上にたどり着いたっちゃか？そもそも退路も確保せずにいきなり壊すからこうなるっちゃ。」

真上からガレキが落ちてきた時には死ぬかと思ったっちゃ。」

と、ぼやいているのは麦藁帽子の青年、つまり零崎軋識であり……。

「大丈夫なんだね。武器とかならともかくあんなガレキ程度の『無機物』じゃあ僕には掠りもしないんだね。」

と、清々しい笑顔で答えたのはおめでたい感じの紅白マフラーを巻

いた奇妙な男、つまりは零崎棟識であつた。

「確かにあんたは当たらないのかもしれないが俺には当たったっちゃ！」

怒り心頭のようにすでブチ切れる軋識に対してそんなことは齒牙にもかけず飄々と棟識は言い訳をする。

「まあまあ、そんなに怒らなくてもいいんだね。それより少々に長居すぎたんだね。さつさと帰るんだね。」

そう言つて、棟識達がその場を立ち去ろうとすると、いかにもその筋ですと自己主張しているステキな黒服さん達御一行が彼等を一瞬で包囲していた。

かなり手慣れているそのスピードは、人気アイドルの追っかけにもよく似ているが如何せんゴツイ体格と青空に映えるサングラスが雰囲気なぶち壊しにしている。

その様子を見て棟識は呆れたように首を振つてこう言つた。

「まったく、軋識君がのんびりしすぎているからこうなるんだ……
「あんたのせいだっちゃ！」うーんそうかな？」

そう言われると軋識は肩にかけたバックを開けながら。

「もう我慢の限界です暴君……！」

と、言つて怪しい笑顔で寄つて来たため、慌てた棟識は。

「うわっ、わかつた、わかつたつてだからそんな怖い顔してこつち

に來ないで欲しいんだね。気が向かないけど仕方ないから僕がこの『有機物』全部肉塊にしてあげるんだね。」

そう言われて、軋識が止まる。

彼はこの仕事を受けるよう長兄である零崎双識からお願い（もしくは脅迫という）をされたさい。

「見えるんだったら彼の対人戦闘も見といった方がいいよ。」

そう言われているのである。

そもそも軋識は棟識が本当に零崎一族なのか？

と、考え始めていた。

たしかに零崎一族特有の家族への愛情は有りすぎるぐらいであったし、ビルを壊す手並みもあつさりすぎる程でこの行為によって千を超える人間が死ぬことを本当になんとも思っていないところは零崎一族史上最も残忍な手口で最も多くの者を殺害したとされる軋識さえ恐怖を感じた。

しかし、それ故に彼は棟識に違和感を覚える。

これまで会ったことこそ無かったが仮にも『家族』の人間に恐怖を感じるなど有り得ないのだ。そのことから軋識はこの戦闘

で『零崎棟識』という殺人鬼を理解しようと決めたのだった。

そついう訳で軋識はそこで歩みを止めたのだが。

肉塊にするなどと言われていた黒服さん達はナメられていると感じたのか、懷から彼等が持つのにふさわしいゴツい銃を取り出すと『乾坤一擲』こと《ホールインワン》を指でクルクル回している棟識

に向かって連射し始めた。

放たれた弾丸は14発、無論殺し名のプレイヤー達ならばいとも簡単に避けて見せるだろう。

しかし、棟識は身動き一つせずに、それを避けた。

いや、むしろ弾丸の方が彼から逸れて行った。

その様子を啞然としながら見ている黒服さん達にすまなそうに棟木識が言う。

「残念ながらその程度の『殺意』しか籠っていない『無機物』じゃあ僕を傷つけることは一生出来ないんだね。」

落ち込んでいるところに悪いけど殺させて貰うんだね。」

その瞬間、一番近い所に居た黒服の頭がまるでトマトのように弾け飛んだ。

意味不明な現象に戸惑っていた黒服達は、自分達がすでに狩る側から狩られる側にいることを理解すると絶叫をあげて逃げ惑った。

3分後……。

見事に肉塊と化した黒服達の死体の上で微笑んでいる棟識を見て軋識は彼を『家族』として認めなくてはならないのだろうな、と苦い表情で考えていた。

崩壊後話（後書き）

次からが本編です。

ちなみに時系列は小さな戦争が始まった辺りで、狙撃手襲来の前です。

零崎屋識（前書き）

遅れましたが投稿します。

情報として、アスが軋識レンが双識です。
もしかしたら気づかれないかと思ったので。

零崎屋識

零崎一族とは流血によってのみ繋がる殺人鬼の一族である。

しかし、わずかではあるが仕事を持つている者もいて、それぞれに単なる趣味や、情報を得る手段となっている。

その中でも零崎棟識の職業は趣味と実益を兼ねており、その実態は罪口商会の工房の建設すら請け負うという裏の建築士である。

「うーんやつぱり我が家は和むんだね。」

そう言つて主に首の辺りからおめでたい雰囲気を発する紅白のマフラーをした男……零崎棟識が呟くと。

「ああ、そうだねえ。まったく君の建ててくれたこの『零崎屋識』《ぜろざきやしき》の居心地は最高だ！何より家まで家族にしたというその発想が素晴らしいと僕は思うね。」

随分と日本人離れして背が高く、しかし針金細工のように痩せているオールバックに銀縁メガネの男……零崎双識が楽しげに答える。彼等が居る場所は、先程の会話にも出てきていた零崎棟識が集めた総額が億を超える尊い寄付金（惜しむらくは三分の二以上が寄付では無く強奪の結果となっている）を大胆に使い建てられた零崎一族の本拠地『零崎屋識』である。

コンセプトは『いつも家族と居られる家』であり、たとえ一人でも家自体を家族と認識するという荒業で『エア友達』なみの佯しさをあたえてくる。

見かけはただの庶民的な家なのだが、地下には巨大な空間が広がっており一人一部屋の大盤振る舞いである。

しかし、当然のごとくほとんどの部屋が空き部屋となっているため新作爆弾の実験に使う『零崎常識』《ペリルポイント》と初めての我が家を異様に気に入っている双識以外には滅多に人が居ることが無い。

理由の一つとして性質上同じ場所に長期間とどまることが上がるが、真の理由は大量に仕掛けられたトラップである。

並の人間では門を開けた瞬間に即死であるため疲れを癒すはずなのに家から出ると入る前より疲れているという矛盾性のため、前述の三人以外の者にはすこぶる不評であった。

「で、急に呼び出して何の用なんだね？
仕事は軌識君ともうやりおえたんだね。」

僕は不愉快な『赤色』を肉塊に変えるために準備をしなくちゃならないから忙しいんだね。」

「いやあそれは悪かった。でも出来るだけ直接話を聞いて欲しかったからね。」

では本題だ、実は今零崎一族は何等かの組織狙われているようなんだ。」

「一族を狙う？」

不思議そうに首を傾げて棟識は言う。

「そんなことやっても百害あって一利なし所か億害あって一利なしなんだね。」

「そう、そのはずだったんだが一昨日酷い目にあっただ。新しく『家族』になるはずだった『赤神』のお嬢様を迎えに行ったら、それはもう見事に罠でね。」

アスは負けるし人識は両腕を折るし散々だったよ。」

「ふうん、軋識君負けてしまったんだね？」

どうりであんなに落ち込んでるはずなんだね。」

「まあね、アスにとってもショックだったと思うよ。」

もちろん僕は勝ったけどね。

それに子荻ちゃんとも知り合えたし……あれ？」

むしろ楽しかったのかな？」

頭を抱えて悶えだした双識を放置して棟識は立ち上がり出かける準備をし始めた。

「大体理解したんだね。」

つまり急な攻撃に備えろってことなんだね？」

大丈夫、僕は零崎としてよりも表の名前方売れてるんだね。」

「おいおい、それじゃあ戦争には参加してくれないのかい？」

そう言われると棟識は糸のように細かった目をほんの少しだけ見開いて言った。

「悪いんだね、

でも可愛い可愛い『作品』達を壊したあの『赤色』は早急にぶっ潰さなきゃいけないんだね。」

まあ、『家族』が襲われてたら助けるしほとんど参加したも同然な

んだね。」

「そうか……。まあ君なら並大抵の奴らじゃあ相手にもならないだろうしね。」

おつと、子荻ちゃんからメールが届いたじゃないか。

これは早速返信しなければ……。」

そう言っただ識は携帯に凄まじい勢いで文字を入力し始めた。

それを見てもう話しても聞こえないだろうと判断した棟識は立ち上がり、その場を後にした。

棟識の気配が完全に無くなったのを確認してから双識はメールを打つ手を一旦止めて、先程届いた“軋識”からのメールをもう一度見た。

「傷は大体治ったっちゃ。だが、これから少し休む。」

戦争に関することはレンにまかせるっちゃ。

それから棟識さんのことだがイマイチわからない。お前も気をつけるっちゃ。」

「メールにまでキャラ立てをしなくてもいいと思うけどな。」

と、苦笑しつつ一転して真面目な表情になり呟く。

「そうだねアス。実を言うと私にも彼のことはわからない。」

だが……。それでも彼は私の家族だ。命に替えても守って見せる。」

零崎双識は変態である。変態かつシスコンでありロリコンでありブラコンでもある。

しかし、彼は長兄であり誰よりも絆を尊び家族を愛する者である。

「たとえ敵がなんだろうと何人居ようと、棟識君の言う『赤色』が

僕にとつての『彼女』

であつても絶対に容赦はしない。」

それゆえに、彼に立ち止まるという選択肢はない。

そしておもむろに立ち上がり彼はまるで神に宣戦布告でもするかのように堂々と、誇りを持って言った。

「それでは、零崎を始めよう。」

零崎屋識（後書き）

文章……。

なんかおかしいですね。

ちゃんとプロットも書いたのにおかしいことになってきました。

事実無根（前書き）

おそくなりました！！

ヒロインを出そうとしているうちに変なキャラが出来てしまいました
たがヨロシクお願いします。

事実無根

ここは黄金の国とマルコ・ポーロに大いに疑問の残る勘違いをされた国日本。

その西側よりに位置する鳥取県の名物鳥取砂丘のすぐ近くに立てられたビルの中から怪しい歌が流れて来る。

「ふんふ？ん、ふんふ？ん、ふいふいんふ？ん！！」

ノリノリで不気味なオリジナルソングを披露していた紅白マフラーの怪人……零崎棟識は自ら設計した『作品』の最後の調整をしていた。

「きつとあの『赤色』は自分が狙われていると知ったら喜び勇んで飛んで来るんだね。」

んで、そしたら僕はこのすんばらしい『作品』で『赤色』の死に様をステキに『設計』してやれば終わり、ムフフ完璧なんだね。」

怪しい歌を止めても人間としての危なさが滲み出ている。

「さてと、大体こんな感じで完成なんだね。後は待つだけ楽しみなんだね。」

そう言つて『作業』を中断した棟識は一脚だけ用意されていた椅子に腰掛けた。

それから1時間後……。

「？」

2時間後……。

「??」

3時間後……。

「????」

「何故なんだね!？」

何故何時までたってもあの『赤色』は現れないんだねっ!？」

ついにキレた。

すると突然、たいして広くも無い部屋に理由は無いのにな人をイライラさせるような笑い声が響いた。

「あつふあつふあつふあ。怒った?怒っちゃった?

ごつめんなっさ?い」

「っ!?!誰なんだね!？」

「呼ばれた?呼ばれちゃった??それじゃあ出て行かなきゃいけないよね。」

そう聞こえたと思うと既に彼女は『居た』。彼女は棟識の前に『浮いて』『居た』

低めの背丈にオレンジと青のだぼついた服を着て裾についたヒラヒ

ラした飾りがその両手を隠し右目の下に涙のメイクを施していた。
まるでピエロの様な不気味な女だったが、一番おかしかったのは彼女が地面から30センチほど浮いていることだった。

「悪いんだけどあの『人類最強』への鍋焼きうどん並のホットなラブレター（挑戦状）は私が回収させてもらったわ。『あの子』は別に入って来られてもなんとかできると考えてるみたいだけど私の雇い主は違うみたいでね、

あんな歩く大量破壊兵器にでしゃばられても困るだけだから一番の呼び水になるアンタは消えなきゃいけないワケ。」

そこで息をついて女はニヤリと笑って。

「私は『事実無根』<バニッシュフットプリント>椎本忌御那しいがもといみな
さて、自己紹介も終わったし早速だ零崎棟識……ここで死ね!!」

宙を舞うかのように突っ込んできた!!

事実無根（後書き）

感想がいただけると嬉しいです。

浮遊少女（前書き）

もう大体ペースがこんなくらいになると思います。

しかし出来るだけ努力するのでよろしければ読んでください。

浮遊少女

「うおおおおおおお！？」

だばだばの袖から覗く銀色に輝く刃が男の前髪を一直線にカットしていく。

ここは島根県と間違えやすいことで知られる鳥取県の鳥取砂丘。

その端に位置する4階建てのビルの3階では奇抜な服装に身を包んだピエロに紅白マフラーの怪人が追われていた。

「っ！！これは予想外なんだね！まさか『赤色』以外の奴が来るなんて！！」

紅白マフラーの怪人零崎棟識は袖に恐らくはカタール（インド生まれの箆手に同化した剣）を仕込んだピエロ椎本忌御那の登場に意表を突かれていた。

確かに挑戦状は出所を隠すため『赤色』に直接送ることは出来なかったが、力さえあれば不道德が道德を上回り非常識が常識に取って代わる『暴力の世界』である。

そんな小さなミスなど関係無く自らへの挑戦を待ち望む肉食獣を罠へと導くはずだった。

しかし、先ほどのピエロの言動を思い出すとどうやら挑戦状は『赤色』に届く前に彼女ら、もしくはその雇い主に握り潰されたようだ。

さらに不意を突かれて防戦一方、知名度は低いものの実力に自信のあった棟識は齒を噛み締めながら復讐を誓う。

「それにしても椎本……ね。」

だんだんと落ち着きを取り戻してきた棟識が微笑を浮かべる。

「確か^{におうのみや}勾宮の分家筋だったんだね。

つまりどこかにあの子の兄弟又は姉妹が居るはず。

『赤色』が来ない以上この『作品』は残念ながら廃棄決定……。」

そこで一度言葉を切り口が耳まで裂けるかのようなびつな笑みを浮かべて棟識は呟く。

「調度良いんだね。

君達では役不足かもしれないけど、『対神作品第2番・黒の上塗り（フィニッシュコートブラック）』の試運転に付き合ってもらうんだね。」

と、言っていきなり足を止めると振り向いて忌御那と向かい合う。

対する忌御那もこれまで逃げただけだった棟識がいきなり戦闘体勢をとったことに対して警戒心をあらわにしていた。

「あらら？逃げるのはやめたの？やめたの？？」

でも悪いけどこれも椎本が勾宮の支配下から抜ける為の第一歩。

おねーちゃんも居るんだし絶対逃がさないんだから……！」

意気込む忌御那に反して棟識は冷静だった。

「なんだ、やっぱり姉と一緒にだったのか。
自分からそちらの人数を覚えてくれるなんて第一印象どうりただの
おバカちゃんなんだね。
そもそもそんなバランスの悪い靴を履いている時点で僕に勝つこと
なんて不可能なんだね。」

その言葉に忌名は驚愕する。

「!!」

「まさかさっきの逃げ回ってたのって……。」

「まあ、大体そのとうり。
考えをまとめたかったのも有るけど浮いている理由も知りたかった
んだね。」

「要するにそれは靴の裏に針のようなものを取り付けて君がひたす
らバランスをとってあるっていうくだらないトリックなんだね。」

確かに二つ名『事実無根』《バニッシュフットプリント》の通り足
跡は残らないけれど、

そんな驚かせるだけの一発芸みたいな物何の意味も無いんだね。」
そう言うつと、啞然としている忌名を無視して腰のホルスターから棟
識の魂とも言える相棒『乾坤一擲』《ホールインワン》を突き付け
て。

「それでは今日も楽しく。」

新しい玩具で遊ぶ子供のような無邪気でかつ残酷な笑顔で宣言する。

「零崎を開始するんだね。」

浮遊少女（後書き）

これから春休みに入るので主人公のプロフィールとかヒロイン登場とかまでは行きたいです。

三次幻聴（前書き）

ずいぶんと遅れてしまいました。

さて、早速新設定を出してしまいました。大丈夫でしょうか？

三次幻聴

あまり大きいとは言えないであろうビル……その1階でしいがもといみな椎本忌御那の姉、しいがもといみな椎本迂御那は焦る妹に落ち着くよう言った。

「はい？『標的』が得物を抜いた？大丈夫ですよ落ち着きなさい。
このビル何だか音が通りやすいの。空間の把握が出来たら私がサポートに回りますからそれまで待つて下さいな。」

そんな姉に流されて忌御那はつい答えてしまった。

「え……わかった。戦闘を続行するよー。」

挽回されたとはいえ一度は彼女達の必勝パターンに嵌まったのだ。
数多くの手練れ達を葬ってきた姉が自信満々なのも仕方が無い。

しかし、忌御那の不安も決して悲観的な物でも無い。

彼女達の戦闘スタイルは奇襲。如何なる相手にも気取られず接近し、奇抜な恰好や地面から浮いて見せるなどのトリックで相手の動揺を誘い『姉』の探知能力によって逃げる相手を捕捉し続け実力を出させずに勝つ。

大抵の獲物は逃げることでさえできずに牙にかかった。

たとえ逃げる事が出来ても何処へ逃げても姉の指示の元追尾して

来る忌御那にパニックを起こし、簡単に殺されていった。

それを破って見せた棟識への警戒が薄いわけがない。

しかし……。

「大丈夫ですよ、私の『三次幻聴』《ディメンジョンイミテーション》に死角は無いですから。」

それ以上に迂御那には自分の能力に自信があった。

なぜなら彼女には『それ』しか無いのである。むろん半身にも等しい妹が居るが、彼女にはまさしく『それ』しか無いのだ。

そのわけは彼女の顔を見ればいやでもわかる。

無いのだ『眼』が。

『眼』だけではない『鼻』も『舌』も果てには『皮膚』すらも無い。

つまり五感の内聴覚のみをのみを残し、後の人間に備わるべき機能や器官の全てを捨て去り『聴く』という動作のみを追究し究極した生物なのだ。

かつて、勾宮には喜連川詩冥きつれがわしめいというマッドサイエンティストがいた。彼の最高傑作といえは一つにして全である『断片集』＜フラグメント＞がある。その制作後には勾宮を去ったのだが、彼はその際置き土産を置いていつていた。

その名は『五覚粹』（ごかくすい）人間を『物』として扱いその能力を才能を一点に集中させ進化させるというプロジェクト。

その結果産まれたのが椎本姉妹である。

喜連川博士が勾宮に『五覚粹』を置いていったのは常に兄弟姉妹で行動する伝統から単体では殆ど戦闘能力を持たない五覚粹をカバー出来るだろうという考えによるものだった。

結論からいえばその考えは見事成功した。限界まで聴力以外を削ぎ落としたために戦闘スタイルが奇襲に限られたが、人間レーダーとして破格の性能を持つ姉とそれなり以上の実力を持つ妹、うまくいかないはずがないのだ。

よって椎本迂御那に退却は無い。

彼女の能力、

三次幻聴は単なる『良く聞こえる』程度には収まらない。

微細な空気の振動すらその鼓膜はキャッチし、聴覚以外を失ったはずの迂御那に健常者を超える情報をもたらす。

よって、彼女はこのビル内部はほぼ完全に彼女のテリトリーと化していた。

「さて、と、少々時間がかかってしまいましたが準備も整いましたし忌御那のサポートに回るとしますか。」
そうして彼女は筋肉や血管の浮き出た顔を不気味に歪ませて……。

「反撃の時間ですよ、棟識さん」

凄絶に征絶に笑った。

三次幻聴（後書き）

喜連川博士の下の名前は創作です。

これからもよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3159p/>

零崎棟識《ゼロざきむなしき》の人間設計

2011年5月30日22時55分発行